

## 第5回（平成21年度第4回）方法論パネル議事概要

日時：平成22年3月24日（水）10：00～16：00

場所：社団法人海外環境協力センター会議室

出席者：水野座長、田上委員、吉高委員、橋本委員、仲尾委員、山田委員

欠席者：橋本委員

### 【議題1 はじめに】

- 第4回方法論パネルの議事概要について事務局より報告。

### 【議事2 既存ポジティブリスト・方法論に対する修正提案に対する技術的検討・審議】

- 削減系ポジティブリスト（E001～E006）
  - ・単位発熱量においては、低位発熱量と高位発熱量の使用が混在していたため、いずれかに統一する。  
→方法論ごとに、高位発熱量または低位発熱量のいずれを用いるかを明記した。
- 廃食用油由来バイオディーゼル燃料の車両等における利用（E004）
  - ・輸入BDFをポジティブリスト対象とするか。  
→日本国内で発生した廃食用油を原料とするとポジティブリストに明記した。
  - ・BDFが国内由来である記録を提出するべきではないか。  
→モニタリング項目として国内の収集元などを追加するべき。  
→市民の集荷ステーションなど国内での集荷記録は国内産と考えてよい。  
→国内廃油利用宣言書を提出するとポジティブリスト・方法論にて記載する。
- 吸収系ポジティブリスト（R001～R003）
  - ・森林の面積の表記を明確化する。  
→方法論ごとに、“樹種別・林齢別の森林の面積”と表記し、表現をより明確化した。
  - ・修正履歴情報を追加する。

### 【議事3 新規ポジティブリスト・方法論（案）に係る技術的検討・審議（パブコメ後）】

- 資料3-1 薪ストーブの使用
  - ・単位発熱量の表記方法を統一するべき。  
→追記する。
  - ・重量は量らないのか。  
→体積から重量への変換を想定し、デフォルト値を用意している。  
→モニタリング自体は購買量となる。
  - ・製材端材については外材が多いがそれについてはどのように考えるか。  
→国内産の証明か、製材端材を対象としないかの2通りではないか  
→把握するとすれば製材所がモニタリングポイントとなるが、国産材か外材かの区分は難しい。  
→製材端材を除けば、国内産の証明は要らないのではないか。  
→製材端材はすでに使われているので、追加性の立証は可能なのか。  
→結論として製材端材については、自己申告による国産・未利用である旨の宣言書を提出してもらい追加性を担保する。
- 資料3-2 フリークーリング及び外気導入による空調の省エネルギー
  - ・新設の場合ベースラインはどのように見るのか。  
→ベースラインは冷凍機だけで動いた場合。フリークーリングのみで全ての電力はまかなえないため従来型の空調機は必ず入る。よってベースラインは冷凍機だけで動いた場合となる。

- 資料 3-3 情報通信技術を活用した輸送方法の効率化による燃料消費量削減
- 資料 3-4 情報通信技術を活用した検針等用車両による燃料消費量削減
  - ・回数だけをモニタリングしてどのように効率化するのか
    - 一回あたりの距離を減らすことは実態としてあるが、結果は ICT の結果とは言いがたい。
    - 集中監視で量をモニタリングする。常にどの状態なのかと分かるようになり、出動する回数の無駄を減らすことが出来、結果としてガスも減ると考えられる。
  - ・データを業者がそろえるのが難しいのではないかと考えられる。
    - 実際に業者にヒアリングを行った結果、モニタリング項目には支障が無いと考えている。
- 資料 3-5 照明設備の更新
  - ・白熱球からの変更でもよいのか？
    - 方法論上特に制限はないが、投資回収の点が縛りとなると考えられる。
  - ・LED からの変更でもよいのか？
    - 事業者から提供されたデータによると 2 本の蛍光灯を 1 本に変更し、反射板を取り付けた場合、投資回収は 5 年。
    - LED に変えた場合は投資回収が 1 年というデータもあるが、これについては正確とは言い難い。
  - ・照度の低下については考えないのか。
    - 照度についてはモニタリングが難しいため、方法論では取り上げないという整理をした。労働安全衛生法にて最低照度が定められている。
    - 結論として備考欄にサービス水準を維持するという記載を入れ、労働安全衛生法の照度基準に準拠することと記載することになった。
  - ・取り外した照明設備を別の場所で使うことはどのように規制するのか。
    - 第 4 回方法論パネルでの議論も踏まえ、状況として考えにくい「他で高効率のものの変わりに使用してはならない」と備考欄へ記載することになった。
- 資料 3-6 高効率アイロン設備の新設・更新
  - ・高効率アイロンを作るメーカーは複数あるのか？
    - 特に一社というわけではなく、複数社存在する。
  - ・新設の場合、ベースラインはどうか？
    - 高効率アイロンが売れている 200 台の内の 8 割程度が同じ機種ということもあり、最も売れている機種と比較するとしたい。

#### 【議題 4 新規ポジティブリスト・方法論（案）に係る技術的検討・審議（パブコメ前）】

- 資料 4-1 硝化抑制剤入り化学肥料の投入による茶園土壌からの N<sub>2</sub>O 排出抑制（案）
  - ・条件にて石灰窒素は除くとなっているが、どのように取り扱うのか。
    - 1%程度の流通であるため、研究結果が無い。
    - 石灰窒素を利用している場合は、硝化抑止効果がすでにあるため。
  - ・硝化抑制剤ジシアンジアミドのみに限定するというのは、同じような製品を作っている人や開発した人への不公平になる。
    - ジシアンジアミド以外にも硝化抑制剤はあるが、国内でほとんど流通していないことと抑制効果がどれだけあるかという研究データが無いためジシアンジアミドに限定した。
    - 結論として効果が立証できれば追加していくという書き方にすればよい。
  - ・論点 3：ジシアンジアミドの販売会社は何社あり、広く一般に扱えるような肥料なのか。
    - 4 メーカーほどあり、一般的な肥料だと考えられる。
  - ・論点 4：経済性評価が不要となっているが、特別扱いとなっているのではないか。

- 投資回収年数とは考え方がそぐわない。
- 普及したら見直すと記載する。
- ・論点5：単位発熱量の表記方法を統一するべき。
  - 追記する。
- ・ジシアンジアミドの製造や輸送に係る排出量は除外するよう修正
  
- 資料 4-2 低タンパク配合飼料利用による豚の糞尿処理からの N<sub>2</sub>O 排出抑制（案）
  - ・国外での製造に係る排出量は考慮しないほうがよいのではないか。
    - イベントリの考え方に則って修正する。
  - ・豚は飼料に係らず食べるが、追加性はどうなっているのか。
    - リジンというアミノ酸を添加した飼料を用いた実験では1 tの飼料当たり1.4 kg程度の削減結果が出ている。
  - ・削減量をどのように把握するのか
    - 低蛋白飼料で直接的に何%削減しているとするわけではなく、PJ前後における飼料中のN分を把握するという方法論となっている。
  - ・統計に含める肥育豚の定義が明確ではない。肥育豚の定義である30KGになった途端計上するのかなど計上のタイミングの明確化が必要ではないか。
    - 調査して反映する。
  - ・単位発熱量の表記方法を統一するべき。
    - 追記する。
  - ・リジンの製造や輸送に係る排出量は除外するよう修正（ただし修正理由をFAQに追記）
  
- 資料 4-3 小水力発電による系統電力代替（案）
  - ・電力と環境付加価値が切り離されていないのではないか。
    - 全量買い取りが開始された場合のプロジェクトの取扱は？
    - 年間売電収入にて回収年数が3年を下回ればJ-VERにはあたらないのか？
  - ・電力買取制度（フィードインタリフ制度）にて売電し、J-VREのクレジットを得るとダブルカウントになるのではないか。
    - 方法論上は今決めなくても良いが、来年制度が始まるとクレジットとして使えなくなる可能性がある。
    - フィードインタリフが始まっても、経済性が低いなどを理由としてさらに認められる道を残したほうが良い。
    - グリーン電力でもダブルカウントにならないよう整理をしながら、平行して進めていく可能性があるようであり、この方法論についても同様にダブルカウント防止のための整理をする。

## 【議題5 その他】

- 方法論・ポジティブリスト全体について
  - ・排出係数はいつごろ決まるのか。
    - ヒアリングをしている最中だが、早めに決めたいと考えている。（環境省）
- ・統一されていない一部の方法論・ポジティブリストについて低位発熱量、高位発熱量の表記を統一すべき。
  - 対応する。
- ・旧バージョンの方法論・ポジティブリストについても閲覧できるのが望ましい。
  - それらへの対応も含め、HPの更改を検討している。
- ・バージョンの扱い
  - ポジティブリストにのみバージョンが記載されているため、ポジティブリスト及び方法論でバージョンを統一し一元管理をする。

以上